

美咲

ひと夏の過酷な 成長記録



SAMPLE

無料お試し版

雨垂石穿
Sekisei Amadare

美咲 ひと夏の過酷な成長記録

第1章 序章～凌辱のはじまり……2

第2章 降りかかる破瓜^{はか}の惨劇……89

第3章 誓わされた服従と調教……107

第4章 母親と娘による競艶……109

第5章 訪れる転機～終章……166

あとがき・使用画像の書庫……200

本作の販売対象は18歳以上です

序章～凌辱のはじまり

1985.6.20 Thu.

梅雨入りして数週間が経過した6月下旬としては貴重な陽差しが降り注ぎ、ハナミズキの街路樹は歩道へと濃く長い影を作っている。

閑静で大きな区画の住宅街は、生垣やコンクリート壁を巡らせて内部をうかがい知ることのできない邸宅が建ち並んでいる。小さな児童公園には遊ぶ子供たちも母親の姿も見えず、ひっそりと静まりかえっていた。

その児童公園を囲んでいる桜の大木の木陰では、日射しを避けるかのように一台の黒塗りの高級外車が停車していた。

運転席の若者が興奮気味に「来ました！清華女学院の生徒です」と助手席の人物に伝えると、仕立ての良いライトグレーのスーツを着た三十過ぎの男性はリアシートの大柄な中年男性に「それでは、お願いします」と告げる。

音もなく助手席が開き、エナメルが輝く焦げ茶色の革靴の爪先がドアの外に差し出される。降り立った男性は、重厚な音とともに助手席のドアを閉じた。

長袖の白いセーラー服は少しアイボリーがかった中間服で、濃紺に2本の白いラインが入った肩幅まである襟は、曲線的なラインが特徴的だ。胸あてには薄めのブルーで校章が刺繍され、同系色のリボンが上品に留められている。

濃紺のプリーツスカートは、ひざ丈の長さが幼げに見える。そんな制服姿の

唐沢美咲が授業後の補講を終えて帰宅したのは、午後5時過ぎのことだった。

真っ直ぐで艶やかな黒髪を1本に束ねた長い後ろ髪を左右に揺らし、ふくらはぎを小気味よく動かして家路に向かう後ろ姿を眺めていた男だが、自宅へと到着した美咲がインターホンに向かって何かを言うのを見るや、斜めに車道を横切ってそちらに向かって足早に近寄った。

その男が少女の背後に近づくのと、門の鉄柵が屋内から解除したスイッチで開き始めるのが、ほぼ同時であつた。

「ちよっとお尋ねしますが……」開いた門扉を入りかけた美咲が振り返ると、そこに身だしなみのよい青年紳士がにこやかに立っているのを見た。

いかにもスポーツマンらしい引き締まった体つきで、若い女性ならば意識をしてしまうタイプの三十代前半に見える男性だった。中等部から高等部に進学して、急に男性の眼を意識する——あるいは意識させられる——ようになった美咲も例外ではないだろう。

「なんででしょうか？」しつかりした縫製で高価に見える本革製の学生鞆を持ちかえることで、気を紛らせるようにしながら訊いた。

「こちらは、唐沢達雄さんのご自宅ですよ？」男は身をかがめて確認した。

「はい、私の父ですけれども……」すこし訝りながら少女は答える。

「お母さまは、ご在宅でいらっしゃいますか？」

「ええ、いると思いますが……どのようなご用件でしょうか？」

「お父さまの会社から伺った者ですが、お取り次ぎしていただけませんか？」
会社と聴いて失礼のないようにすべきと思ったのか、「あつ、はい。ご案内します」と丁寧に請けて応える。

「有り難うございます。実は、もう一人おりまして……」すでに2人の所まで来ていたもう一人の男性——肥満しきった禿頭の大柄な中年男性は、無警戒な美咲の眼には、若い男の上役として映っているようだ。とくに疑念を抱くことなく「どうぞ」と言っただけで先に立って歩きだした。

若いほうの男性はすぐ後ろについて歩きながら、しっかりと結ばれた黒髪によつてあらわになっている首筋のか細い美しさ、学生鞆を重たげに提げている白い腕の伸びやかさを見て、（ロリータの嗜好など無かった）彼らしくもない昂ぶりを抑えかねていた。

彼女の母親である唐沢香織の身辺調査によつて何枚かの容姿は目にしていたものの、本人をこれほど近くで見るのは初めてである。あまり鮮明でない画質でも『かなりの美少女』という印象だったが、実物はそれ以上であり『触れるのさえも躊躇ってしまうほどの透明感』とでも表現すれば相応しいだろうか、そんな一縷の穢れも想像させることのない無垢をイメージさせた。

ふっくらした頬の丸さが幼い印象を与える顔立ちには、（背丈が百五十センチ

ほどと低いことも相まって）大人しそうで、可愛らしい『中学生のお嬢さん』のようにしか見えない。

つぶらで引きこまれそうな黒い瞳、すっと通った鼻すじ、結ばれた口もとの上品さ、時おり見せる大きめな2本の前歯をふくめ美しく整った白い歯並び：挙げてゆけばキリないが、そんなもの総てを引くくめるめた品格と清楚な外見、育ちの良さ、驕の厳しさが、凜とした可憐な美少女を創りあげている。

そのうえ、子供のような愛らしさだけでなく、秘めやかに盛りあがっている制服の胸元やスカートの腰の張りに、岡野誠司は（本人は気づいていないだろうが、すでに女性としての息吹を感じさせるものがあるな：）と、そんなことにも思いを巡らせて歩いていた。

つまり、女性に関して目利きである——禿頭で巨漢の中年男——真鍋正造のお眼鏡に一瞬で適った、彼女の母親である香織の美質の芽生えが、すでに娘の美咲にも見え隠れしているということのようだ。

芝生によって綺麗に縁どられた舗石の小道を十数メートルほど進み、石段を二段あがると玄関になる。3人が玄関に達すると同時に、洋風な彫刻を施した重いドアが内側から大きく開いた。

「咲ちゃん、なにを……」グズグズしているの？と言いかけた香織の口がそのまま凍りつき、表情から血色が失われた。

「この方たち、お父さんに用件があつていらしたみたいで、外から一緒に……」
と言いながら、母親の表情があまりに陰しいので不安げな顔つきになった。

「こっ、この人は！」声を喉にからませつつ、大きく見開いた眼を美咲の背後に立っている誠司に釘づけにさせている。

「奥さん、ご無沙汰しております。どうやら、私の顔をお忘れではなかったようですね」と言つて丁寧にお辞儀をする。

香織はギュッと握った手の甲を大きく開いた口に押しあて、首を振りながら後ずさりした。その左手は愛娘の腕をしっかりと掴んでいる。

「どうしたの？お母さん」美咲は腕を引っばられながら、目を丸くして母親と若い男とを交互に見くらべている。

1週間ほど前、習い事である活け花の発表会で、場違いなほどのフォーマルなスーツに身を包んだ見ず知らずの男に、「会わせたい男性がいる」と熱心に口説かれたのが最初だった。それ以降も（どうやって調べたのか）何度となく自宅の電話で接触してきたのが、岡野と名乗るこの男性だった。

先日はインターホンまで押され、それ以降も相当な警戒を続けていたのだが、——対面してみて、先月の法事でも姿を見かけた記憶がよみがえり——かなり以前から入念な計画によって自分が狙われていたという現実を知覚した。

「につ、逃げなさい！早く！」

香織は自分を取り戻して鋭く叫ぶと、娘を家の中に押しやって同時にドアを閉じようと試みた。だが、そのどちらもが誠司によつて遮られてしまう。

もう一方の手首を掴んで少女を引きとめるのと同時に、体を玄関のなかへと割り込ませてドアが閉じるのを防いだ。そして、香織が悲鳴をあげるよりも早く、体あたりする勢いで母娘へおやこを玄関の奥へと押しやった。その後ろからゆっくりと真鍋が入り、ドアに錠を降ろしてチェーンをかけた。

玄関のたたきは4人が相対しても、まだゆとりのある広さだった。その中で香織が左手で美咲の手をしっかりと握りしめ、その美咲はもう一方の腕を誠司に掴まれて、真鍋は香織の右腕を掴んでいるという恰好で対峙していた。

「奥さん。顔を見るのは初めてやろが、この声は聴いたことあるんと違うか？ちいともワシの話を聴いてくれんかったがな」

振りほどこうとする香織の手を掴みなおしながら、巨漢の男は言った。

そう、最初に岡野と名乗る男が電話をしてきたときに、会わせたい男性として代わったのが——しわがれた関西弁の——この声だった。

「ワシはこんな手荒なことは好かんかったんやが、あんたみたいな隙がなくて品のある女性は、とても普通のこっちゃ埒へらち」あかんと思うたんや」

なんと表現すべきか、一般的に醜悪としか言いようのない面構え——まるく

禿げた頭に赤ら顔、ゲジゲジ眉毛の下に小さな三角形の眼が寄っており、太い団子鼻に分厚い唇——であり、顔がそうなら体型も同様で、白い麻のスーツに開襟シャツで身を包んだ巨体は、せり出した太鼓腹の下で締めあげたベルトが引きちぎられそうだった。

そんな真鍋が、慣れなれしく香織の腕を握りしめて傍に立っているのだ。

岡野の接触以降は、電話にも玄関のチャイムにも戦々恐々と気を病んで過ごしてきたのだが、それがこともあろうに何も知らない娘の案内で、堂々と玄関先から押し入ってくるとは想像もしていなかった。

「年寄りのこのワシが、押し込み強盗みたいな真似してお願いしに来たんや。そここのところを汲んで、ひとつ、仲よう相手してくれへんやろか？」

これも一種の口説きなのだろうが、一語一句に虫酸が走る。そのうえ、傍では娘が聞いていると思うと、その下品さに身が細る思いがする。

汗の浮いた美貌に決意を漲（みなぎ）らせて、慎重に言葉を口にした。

「お願いですので、今日のところは、お引きとりいただけませんでしょうか。お気持ちは十分に承知しましたので、明日……いえ、どうか日を改めて……」

そこまで言うのと、当初の気力が萎えて、しどろもどろになった。

手を掴まれながら「娘もおりますから……どうか、お願いします……」そう言って、不本意ではあるが頭を下げた。

「この人たち、お父さんの会社の人というのは嘘なのね！どんな関係なの!?」
たまらず口をはさんだ。

「あなたは黙ってなさい！早く、お部屋に上がって」

香織は娘をかばうように後ろへ引こうとしたが、それは誠司の腕に阻まれている。手首を掴んでいる手に力が加わったことで、美咲は仔犬のような悲鳴をあげた。愛娘の悲鳴を聞いて母親としての感情が動転した。

「むっ、娘は、娘には関係のないことでしょう！離してやってください！」

そう叫びながら男から奪いとうとしたが、それよりも一瞬はやく、美咲は掴まれた手首を背中で逆手にねじりあげられ、誠司に抱きすくめられていた。

「いやあーっ！」黒い革靴を取り落とし、悲鳴をあげてもがく娘を取りもどそうと、香織は誠司に掴みかかったが、そこを真鍋の巨体が割って入った。

「奥さん。明日や言うけど、男が女のことを思うて奮い立ったら、明日はないのや。そんなやつたら、可愛い娘さんまでえらい憂き目を見ることになるで」

棒立ちになっっている香織は、誠司の右手に握られたナイフがキラッと刃を立てて、蒼白く透けている娘の細い喉元に当てがわれるのが見える。両手を揉みねじって、うわ言のように「美咲は……娘だけは……」そう口走って、土間にガクリと膝をついたところを、真鍋は強引に引っ張りあげて立たせた。

「跪くのはもつとあとやで」真鍋の声色が、異様な威圧感を帯び始めている。

「それより、娘さんの身になにか起こらんうちに、奥へと案内して貰おうか」
「そっ、それは……」香織は怯えながら首を振ると、軽くウェーブしていて娘よりも長く束ねられている黒髪が揺れた。

か細く喉を絞りつつ美咲がのけぞる。冷たいナイフの背が顎を押しあげており、大きく剥いた目が恐怖にひっくり返らんばかりだ。

「あんたが素直に寝室へ案内してくれんと、娘さんがひどい目に逢うのは間違いのないことや。それくらいは分かるやろ？」

「ご、ご案内……します……」香織は血を吐く思いで、そう返答せざるを得なかった。

夫婦の寝室は、玄関から通じる廊下の突きあたりの右手にある。

サンダルを脱いで玄関の板敷に上がり、そこから寝室のドアの前まで、香織は雲を踏んでいるような心境だった。よろめきそうになるのを真鍋が後ろから小突き、そのあとを美咲が、さらに美咲を逆手に取っている誠司が続いた。

「……ここは、どうか勘弁してください……」そう言って最後の哀訴を試みる香織を無視して、真鍋はドアを開けて押し入った。その後からは誠司が美咲を押しこんで、自分も入るなりドアをロックさせた。

そこはいかにも経済的に余裕のある上流の若い夫婦の寝室らしく、落ち着い

たなかにも淡いピンク色を配色した空間だった。

ドアに近い場所はくつろげる場にしたらえており、その右手奥にツインのベッドがある。こちら側には書きものができる簡単な机と化粧道具の一式が整理されたチェスト、本棚、クローゼットなどがある。ベッドルームと仕切るために部屋の中央には分厚いカーテンが引けるようになっており、そのカーテンをまとめて結んであるドア側の壁には3本の飾り柱が連なっている。

つい今しがたまで香織が過ごしていたのか、部屋はエアコンが効いており、廊下から入ると、すっと汗が退くように感じる。

「せめてこの程度の暮らしをせんと、人間は人間らしくならんし、女は女らしくならんみたいやな」と真鍋は満足げに言った。

どこぞの上品な若奥さまかと思った女性が、調べてみると『うさぎ小屋』に住んでおり、一皮むいたら勝ち気で手を焼いたという経験が真鍋にはあって、それをよく知っている誠司も同感なのであった。

床に突っ伏したままの香織を真鍋が奥へと急ぎ立てるあいだに、誠司は恐怖のあまり震えが止まらない——そんな制服姿の少女の背中を小突いて飾り柱に向かわせた。

観葉植物の鉢を横にずらして、ベッドからもっとも遠い柱に美咲の背中を押しつけ、強く掴めば折れてしまいそうな手首を後ろにねじあげつつ、柱を背負

わせる恰好で革手錠をかける。

「ゆっ、ゆるして……」怯えながら泣きだした美少女に、「大人しくしてりゃ、何もしやしないよ」と慰めにならない言葉を囁いておいて、今度はその可憐な口を粘着テープでふさいだ。初心な少女の発する悲鳴を聞きたくないわけではないが、ここは地下の密室とは違うのだ。悲鳴が周辺まで洩れるリスクは最小に抑えるべきであろう。

誠司は窓のカーテンをしっかりと閉じて室内灯のスイッチを入れた。そのまま寝室を出て玄関まで戻ると、美咲が取り落としたままの学生鞆を靴入れの天板に乗せて、そこに転がっていた自分のアタッシユケースを拾いあげた。

ふたたび寝室に入ると、香織は薄いピンク色のカバーをかけたベッドの傍に立たされており、両手で顔を覆って震えていた。

「まだ言うことを聞きませんか？」

アタッシユケースを旦那のベッドの上に置きながら訊いた。

「やはり、あんたの手を借りんとダメらしいわ」

それを偷しんでいるかのように、真鍋は大袈裟に肩をすくめてみせた。

誠司はスーツの上着を脱いで床へと放り投げて、ネクタイを緩めた。美咲の眼前に立つと、ものも言わずに胸元のリボンを外して床に落とし、前合わせのホックを一瞬で引きはずして緩めた。



前開きになった上衣を捲り上げると、頭をとおして上半身を剥きださせた。

小さな白い肩を露出させると、粘着テープでふさがれた喉の奥で苦鳴しつづき必死に首を振りたて身を揉んだが、肩先から腕まで剥き出しにされるのを防ぎようもない。

まっ白な飾り気のないキャミソール越しに、ブラジャーに護られた双のふくらみが、恐怖に震える激しい喘ぎを男たちの好奇の視線に曝けだしている。

「さあ奥さん、あんたが脱がんと娘さんが代わりに裸にされることになるで」そう言われても、香織は眼前で起こっている非道に声もなく、歯の根も合わぬ有り様だった。

「ワシらとしては、どっちの裸でもええんや。娘さんかて、あと何年かしたら食べ頃になりそうな感じやし、お人形さんみたいなカワイコちゃんやからな」
「もう、これ以上……娘だけは……」香織は眼をつむり、天を仰ぐ貌（かお）になつてブラウスのボタンを外す動作を再開させた。

この界隈の住宅街は、歩くにも軽装だと目立ってしまうらしく、落ち着いたブルーのブラウスにライトグレーの夏っぽいフレアスカートという、コンサバティブな服装に身を包んでいる。

肩をすくめて腕からブラウスを抜きとる。白くならかな肩へと連なる鎖骨があらわになり、ブラジャーの胸元からのぞく谷間は汗にしっとり光っていた。

そんな胸を抱きつつ沸きあがる羞恥心に耐えていたが、スカートのホックをはずしてファスナーを引き下げた。

腰の張りから押し下げて片足ずつ抜くと、スカートも同様にベッドの上に置いた。意を決してストッキングに手をかけてグイッと引き下げる。頭がボーっとなり、何度もよろけて座りこみそうになりながら、どうにか爪先からストッキングを抜き取ることができた。

香織は両脚を合わせて立ちすくむが、レースの飾りとチュールをあしらった薄絹の上品な淡いピンク色のパンティと、それと対になっているブラジャーは如何にも高級品のように見える。

そんな恰好で耳から首筋までを桜色に染めている香織だが、（娘の美咲と同様に）大きな眼を除いた各パーツは小ぶりのスツキリと整った顔立ちの印象で、無駄な贅肉などが殆ど見られない身体の造形は見事としか言いようがない。

娘ほどではないが、百五十センチの半ばくらいと小柄なこともあり、高校生になる娘を産み育てたと聴いても俄かに信じがたい容貌だが、この夏には39歳になることも事前の調査で確認済みだ。そんな香織は、身体から魂を抜かれてしまったかのように身じろぎさえできず、ただ立ち尽くしていた。

誠司は黙ったままプリーツスカートのファスナーを引き下げ、ホックを外す。濃紺の重たげな布地が支えるものを失って落ちようとするのを美咲は脚をハの

字に開いて抵抗する。粘着テープの奥で泣き声をくぐもらせて足掻くが、その振れで徐々に白い下着と腰まわりのラインをあらわに浮きあがらせる。

「さながら母親と娘のストリップ競争やな」真鍋は笑った。

愛娘の救いを求める眼差しに急ぎ立てられるようにブラジャーのホックを外すと、まっ白に艶光りする香織の乳ぶさがこぼれた。それを片方の腕で抱くように隠しながら「もうこれで……赦してください……」と言うのが精いっぱいだった。

「なにを言うとするか！ まだ一枚残つとるやろが」

「そっ……それだけは……」真鍋に促されるまでもなく、誠司はナイフを取り出して、起こした刃先を美咲のキャミソールの肩ストラップにこじ入れ、左右ともにスパッと切断してゆく。

美少女は鼻を鳴らして激しく息をつきながら、キャミソールを引き下げられた胸元でブラジャーが剥きでてきた恰好だ。

袖を通した状態で制服の上衣を背中へと剥かれ、露出した小さな肩に掛けてあった肩紐を切られたキャミソールは頼りなげに細い腰まわりに引つかかるようにして寄せあつまっている。双乳のふくらみを覆っている飾り気のない白いブラジャーは完全にあらわになっていた。

すでに濃紺のスカートはウエストの位置が膝まで下がってしまつて、上縁に

小さなリボンと外周に細かいステッチのある幼げな白い下着が丸見えになっていた。中途半端に衣服を剥かれて恥辱に身体を震わせ、泣きそうな表情で苦悶している立ち姿は、完全に剥くよりも艶めかしい被虐感を漂わせている。

誠司はいったん手錠を連結するフックを外すと、少し乱暴かつ強引に制服の上衣を腕から抜き取り、ふたたび柱に括りつけた。その様子に気づいた香織が、「もうやめて！……仰るとおりに……」と悲痛な叫びをあげたとき、娘のスカートとキャミソールは完全に床上に落ちており、ブラジャーとパンティ、短い白のソックスだけという姿に貶められていた。

まだ年端もいかない愛娘が半裸に剥かれ、身体を振りつつ肩を震わせて泣くさまに、香織は自身の羞恥心を忘れた。パンティのゴムに両手をかけ、お尻のほうから引き下げると、布切れのように小さくなったピンク色の下着を片方ずつ爪先から抜きとった。

「よし、そのままシャンと立つんや」

真鍋は分厚い唇をなめずりながら命じる。

香織は左腕でたわわな2つの乳ぶさをしっかりと押さえ、右手で下腹の茂みを隠しながら、四十歳を前にした美しい裸身を好色の眼差しに晒しあげてゆく。

みずからの意志で屈辱に追いこまれてゆく恥辱ならば、いっそ無理やり暴力で言いなりにされるほうが、よほど気持ちが楽なのだろうと思う。だが、眼の

前に半裸に剥かれて泣き悶えている愛娘の、消えも入りたげな恥じらいの姿を見せられては、母親としてこの汚辱を呑み込むしかないのだ。

これ以上、娘の裸を男たちに晒すようなことにでもなれば、どのような獣欲が娘に向けられるかもわからない。

（いや、もう遅いのでは……）そんな恐怖に絶えず苛まれずにはいられないが、かといって「はいどうぞ」と、あつさり裸身を開帳できるものでもない。そのふたつの感情にジリジリと焙へあぶられるような時間を過ごしていた。

「両手をどけんと、肝心の場所が拝めんて」その声は、汗まみれの肌を逆撫でした。

「早いとこ、オメコを晒して見せるんや」

「いや……もう、やめて……」首をきつくねじったまま、泣き声で訴えた。

「そうやって涙を流さんばかりに恥ずかしがっている恰好も悪うないが、自分から何もでけへんのやったら、ベッドで白い股をおっぴろげて、ワシを淫らに誘ったらええわ」

お嬢さま学校で知られる清華女学院の高等部で、1年生になったばかりの娘になど聞かせられる言葉ではない。香織はギュッと下唇を噛んで、耐えきれずにガクツと膝をついた。

「それとも可愛いお嬢ちゃんを身代りに、奉仕してもらっても構へねんで」

「そ、それだけはっ！……それだけは、お願いです！」

「ならば、サツサと言うとおりにせんか！ワシは気が長いほうだが、こっちの若いモンは可愛いお嬢ちゃんを目の前にして、そう我慢でけへんやろからな」

「お願いします……私は、どのようにされても……む、娘だけは……」

胸と下腹部を押さえたまま、美しい顔を床に擦りつけんばかりに懇願した。

「その言葉にウソ偽りはないんやろな？奥さん」

「はい……ごさいません……」

「ほな、奥さん。ここまで這ってきて、ワシのチンポをしゃぶるんや」

「いやぁーっ！」

卑猥な言葉に反射的に大声を発して、香織は大きく頭を振りたてた。

ひとり娘の美咲のことは大切に育ててきて、目に入れても痛くないと思ってはいるが、実際に娘が見ている目の前でそんな卑猥なことができるわけがない。ましてや自分の意思で奉仕するといった恥辱など……と逡巡していた。

真鍋は「ほう、またイヤイヤか」と呆れた素振りをすると、誠司は黙ったまま手にしたナイフの刃先を少女のブラジャーの肩紐に差し込む素振りを見せる。美咲はビクッと細い身体を震わせた。

「……い、いたします……」

ガクツと首を折ると、そのすばめた肩に嗚咽の怯えが湧いた。真鍋も香織の

恥じらいに悶える美しい裸身を前にして、はや勃起し始めているのだった。

「ううっ、ううっ」

呻きを絞りながら、（日常的に香織が使っている）スツールから尻肉をはみ出させて座って待つ真鍋の足元へと、片膝立ちにさせた裸身を這い寄せた。

それを見かねたように、美咲は粘着テープによる猿轡の下で激しく呻きつつ首を振りたてるが、ナイフの刃がブラジャーの肩紐にさし入れられている以上、香織は恥辱の道を前進する以外にない。

娘に視線を合わせることなく「咲ちゃん……お母さんを見ないで……お願い……ね」そう弱々しく訴えようと、真鍋の股間のあいだに白い裸身を小さくしゃがませた。

香織はこみあげる汚辱感を振り払うように頭をひと振りすると、胸と下腹部を覆っていた両手をほどいて、ズボンの硬いふくらみに白い手を差し出した。真鍋はゴクリと生唾を呑み込んで、その繊細な指先の動きを凝視している。

チャックが引き上げられてゆく傍には、パンと張った形のよい乳ぶさが鳩尾を汗に蒼く光らせて激しく起伏していた。

「グズグズせんと、早う掴み出すんや」

「ああ……は、はい……」香織は呻くような喘ぎに肩を波打たせ、顔の上気を深めながらズボンの前合わせを割って、右手をその中に入れた。

（ああ……っ）ブリーフの上からでも灼（や）けつくような怒張の熱氣と異様な大きさに、眼がくらんでしまう。呼吸を乱しつつ中央の布地を片寄せ、差し入れた指先でチャックの外へと欲望のたぎる肉柱を引つ張り出した。

恐怖よりも好奇心が勝ったのか、指を絡めるつもりなど無かったのに、気がついてみたら剛直をしっかりと握りしめていたのだった。

細く長い手指で胴を握られているイチモツは、赤黒い輝きの中心にひとつの目を僅かに開いている奇怪な生物さながらであった。その逞しい息づかいが、握った掌（てのひら）にじかに伝わってくる。

「ふふ。ひとたび馴染ませたら、身体のほうから吸いつきたくなるで」香織の憑かれたようなさまに、顔を覗きこんで脳内へ刷りこむように呟いた。

左手でさらに根元まで完全に引き出すと、右手をゆっくり動かし始める。汚辱の極限で何かが反転して無意識の酩酊状態に陥ったのか、いまや娘の眼も気にならないほどだ。

思考が麻痺して、久しく忘れていた官能への渴望が四十歳を前にした香織の心中に芽吹いていた。胸が苦しくなるほど忙しく息づきだすと、やがて乳首が勃起してムズ痒く疼きだす。

膝立ちで閉じあわせた太腿のあわいの中心も重く脈動しだして、熱い波動が身体の内深くから絞り出されてくるのが解った。

香織は眼前で鉤（かぎ）のような鰓（えら）を張って逞しい脈動を掌に伝え、てくるものから目を逸らすことができず、その生臭さと熱量を放っている肉柱へと熱い吐息を吐きかけながら、薄く目を閉じて徐々に啞えていった。

あまりの非現実的な光景に、美咲は驚愕の嗚咽を噴きあげて涙を流している。香織が真鍋の醜怪な代物を深ぶかと啞え込むのを見て、誠司は思い出したかのようにブラジャーの肩紐からナイフを抜いた。

その拍子にストラップが腕のほうにスルッと垂れ落ちて、ひ弱げな肩からは邪魔なものがなくなった。それによって急に色っぽさが匂い立つようであり、うっすら汗を滲（にじ）ませた首から胸元の透けるような白い肌——そこから乳くさいような甘い少女の匂いが立ち昇り、経験豊富な誠司をも悩ませる。

白いブラジャーのふくらみの喘ぎ、まっすぐに美しい黒髪を束ねたうなじの怯え、脂肪の乗りのない平べったい腹部を飾るお臍のくぼみ、まだ薄いが張りはじめた腰には、ピッチリと白い飾り気のないパンティを食い込ませている。その太腿の根元は柔らかそうに盛りあがっていて、女性へと近づきつつある少女の息吹を感じさせる。

小柄な美咲の身体つきは、（上半身はまだ子供でしかないが）腰からくびれまでの丸みのあるラインや、太腿の肉づきは大人へと近づいている過程が見え

隠れしている。女性への成長過程にあるチグハグな色気は、女の匂いに慣れている誠司をかえって悩ましくさせているのだ。

そして、恥じらいを覚えはじめた15歳という年齢も、幼い反応を見て愉しむどころか、嗜虐へしぎゃく的な欲情を芽生えさせて痛いほど刺激していた。

これほどの穢れない美少女を鼻の先にぶら下げられながら、啞えた指を引っこめるような性分ではない。娘の美咲はあくまでも母親を脅す手段——という真鍋との取り決めがなかったら、とつくに味見をしているところだ。

その美咲は、先ほどから首を大きくねじったまま、ひいっ、ひいっ、と呼吸を荒くして嗚咽しているが、そんな弱っている少女の虐げられた姿を見ると、余計に煽りてなくなるのが嗜虐者の性なのかも知れない。

「お前を救おうとして、お母さんはあんな恥ずかしいことをやってるんだぞ。少しは見てあげたらどうなんだ？」そう言うのと、後頭部にまわした手で束ねている髪を掴み、顔を母親のほうへとねじ向けた。

そんな娘の視線など意識の外へと弾き出したかのように、母親は両手で捧げ持った野太い肉柱をその長さいっぱいに顔を大きく前後させている。口からは淫靡な濡れ音がたち、唇と舌でしゃぶる音が聞こえ、頬が吸引で膨張と収縮をくりかえしている痴態が見えている。

その端整な貌へかおは昂ぶりに上気し、汗にほつれ毛をしとどに貼りつけ、

凄艶な美しさを放っていた。だが、娘である美咲にとって、それは決して見てはならない母親の姿とも言えるのだ。

しかも、その相手の存在というのは恋愛の対象ですらなく、香織の美しさを冒瀆するようかのような、醜悪で卑怯な巨漢の中年男である。男の持つ邪悪な力に魅せられて女性になり下がっている母親を見つめ、粘着テープの下で呻きを絞り出しつつ、美咲は何度も頭を左右に振った。

「お前さんは、男と女のことをまだ何も知らんからそんな顔をするが、女はああやって男に奉仕するものなんだよ」

まっ赤になった少女は眉をしかめ、「うーっ」と鼻から長い息を吐いてのけぞった。自由を奪われた素肌からは脂汗が噴き出して、不安げに腰を動かしている姿態に堪らなくなつて、幼げな胸のふくらみへと手を伸ばしかけたとき、

「ちいと頼むわ」と真鍋が声をかけてきた。

「ワシは縛らんと感じが出えへんみたいやわ。奥さんを縛ってくれへんか」

「承知しました」香織が喉を鳴らして抗議の声をあげるのを、真鍋は髪を乱暴に掴んで喉を突きあげて黙らせる。

女責めに必要な道具一式を整然と収納しているアタッシュケースを拡げて、誠司は縄の束を1つ取り出した。その縄を扱くへしごく〜と、ねっとり背中を光らせて正座したまま真鍋の巨体に対峙している香織の背後に立った。

美咲とはまたちがった成熟の美に、眼くるめく思いになりながら、「奥さん、両手を後ろにまわすんです」と言って、背中を縄尻で軽くしばいた。

口淫を止めることが赦されない香織は、ふさがれた喉奥で喘ぎながらも真鍋の怒張に添えていた手を後ろにまわして、腰の上あたりで手首を交差させた。

この死にもまさる辱かしめを喉の奥で苦悶しながら、香織は後ろ手に高々と括りあげられてゆく。

喘ぎ弾む乳ぶさを上下から挟むように巻き締められ、首縄をまわされ、腰縄まで打たれて罪人のような姿に仕上げられた。いましめの苦しさによって半死半生となり、ただでさえ口内にあまりある長大な怒張を啜えていられない状態になっていた。

縛めを終えると「そろそろ、お床入りですか？」縄尻を取った誠司は訊いた。「うむ。そろそろコツチも我慢できなくなりよったわ」

真鍋が腰を引くと、濡れた肉塊は卑猥な音をたてて口から抜け落ちて、首がガクッと折れた。腰が抜けたようになって自力では立ち上がれない香織を2人がかりで抱えあげ、裸身をベッドの上で仰向けに転がした。

「ああ……」香織は激しい恥じらいの声をあげて下肢を横にねじったが、陰裂の内部から内股のつけ根までが、眼もあてられぬ惨状になっていることを本人も自覚しての反応だったのである。

真鍋がゆっくりと服を脱ぎだすと、「こんなところを……娘には見せないでください……お願いします……」香織は後ろ手の身を振りながら哀訴した。

「娘に見られていては、思いきり楽しめんちゆうわけか？」

「……どうか、それだけは……赦してください……」

「まあ、ワシにとつても奥さんに心の底から悦んでもらわんと、楽しゆうないからな」真鍋はシャツを脱ぎながら、誠司に目配せ（めくばせ）した。

誠司は部屋をふたつに仕切るカーテンを閉じると、美咲を飾り柱からはずしてベッドの対角に置かれた2脚ある1人掛けのソファアの片方に向わせる。

ふたたび後ろ手錠に縛めると、身体を小突いて座らせた。少女の口から粘着テープを取ってやると、ふうーっと大きな息を吐く。

「大人しくしているんだ。そうすれば、これ以上、怖い思いをしなくて済む」美咲は涙をいっぱい溜めた大きな瞳で見つめながら真剣に何度もうなずき返した。

だが念のため、白いソックスの足首も革の黒い拘束具で括りあわせた。

「ああ……こつ、こんな……いや！無理ですつ……」

カーテンの向こうからは、うわずった母親の悲鳴が聞こえてきた。

美咲はビクつとなつて眼に怯えの色を漲らせた。誠司はニヤニヤ笑って顔を覗き込みながら、やや浅めに座わるようにお尻の位置を調整すると、うぶ毛の光る柔らかな頬をゴツゴツした手の甲で優しく撫であげた。

「これからママがどんな声を出しても、心配することは無いんだからな」

まるで子供を諭すように言いながら、誠司はソファの後ろ側へとまわる。背後から頬を撫でていた手を（カーテンの向こう側での惨事を想像して喘いでいる）小さな胸のふくらみへと、そっと運ばせた。

「あれは女が男に可愛がられて出す声なんだよ」

Bカップとおぼしきブラジャーは、少し大きいようで浮き気味になっている。それを掌で包こむように優しく握りしめて揉みほぐすと、美咲は「い、いや……」と顔をゆさぶって——先ほどの約束と行動が一致していないと勘づいたのである——サツと振り向いて一瞬だけ鋭い目つきを男に向けた。

それでも、この場の支配者である誠司はお構いなしだ。

「お前さんだって、嫌だとか言いながら、こうされるとジーンと感じるモノがあるんじゃないのか？」

耳元で囁かれると、幼い貌を上気させた。お嬢さま育ちの少女は、恐ろしい男どもの暴力行為に抗う氣力を奪われ尽くして、ただただ恥じらうばかりだ。

「ひっ……いやあーっ！……ああ……うつ、うつ……」

また香織の昂ぶりきった声があった。真鍋の汚らわしいまでに仕上がった怒張によって奥まで貫かれた反応だということは、誠司には見なくてもわかる。

なにかは解らぬが、耳にしたことのない母親の艶っぽく乱れた声色にハッと

胸を衝かれたようで、赤くした顔を振りたてている。そんな初心な少女の反応にたまらなくなつた誠司は、飾り気のないブラジャーを上にならずらし、初々しく息づく白桃さながらの乳ぶさを剥き出しにした。

「いやっ！」そうされる可能性も想像してはいたが、男性に胸を剥かれる恐怖に戸惑つて、つい大きな声を発してしまふ。その幼いふくらみを誠司は慈しむようにして掌にくるんだ。

「ああ……いつ、いや……それは、ゆるして……」

生まれて初めて男性から刺激を与えられる羞恥と恐怖に、齒の根も合わぬほど怯えている。ひ弱げな鳩尾の起伏は、まるで嵐でうねる海面のようだ。

それとは対照的に、誠司はピンクがかった淡い褐色の乳首をポチッと尖らせているマシユマロのようなバストの感触をじっくり味わっている。しつとりと掌に吸いつく柔らかい皮膚の感触、錯乱で熱気を帯びた温かさ、そして指先に力を入れれば弾きかえしてくる張りのある硬さ、こんな味わいは少女ならではのものではあるう。

やや丸みのある顎先を引いて、はあっ、はあっと荒い息づかいを見せつつ、うつつなく垂れた頭を振っている。カーテンの向こうでは、母親の戯れのような喘ぎが忙しなく昂ってきていた。

「そんな声を出すと、娘さんに聞かれるぞ」真鍋にからかわれると、ひいーっ

と息をつめるが、すぐに昂ぶりへと戻ってしまふ。そんな母親の乱れようは、高校に通いはじめた初心の娘を平素の何倍にも敏感にしているに違いない。

半裸状態の美少女は、「ああ……。お母さん……。」と、うわ言のように口走りつつ、男が与え続ける刺激にうっすらと眼を閉じて熱い吐息を漏らし、全身は汗を浮かべさせだしている。右手を胸のふくらみから離すと、よく動く白い下腹部を這わせてパンティの上縁をなぞる。

「いやっ……そこは、だめですっ」美咲は弾かれたように腰を振って膝小僧を擦りあわせたが、誠司は構うことなく太い指先をスルっと白い下着の中にもぐりこませた。

母親を心配さたくないとの思いからか——呟くような小声で、「ああっ……だめ……なのに」と口走って腰をひねったが、誠司は左手で太腿を強引に押し開くと、背後からしつとりと柔らかな双肉の盛りあがりやを掌にとらえた。

さわさわした絹糸のような手ざわりが僅かに上部を覆っており、それは太腿のあわいまでの明瞭な谷間になっっている窪みへと連なっていた。

誠司は血液が酸っぱくなる思いで上下に指を這わせ続けるのと同時に、背後から白い首筋に唇を這わせている。しつとりと吸いつくような湿り気を帯びた柔肉が、くすぐられるような軽いタッチの連続に脈動していた。

そして美咲もまた身体を硬くして「ああっ、ああっ」と悶えるような喘ぎを

一定のリズムで漏らしている。

「そんな……もっ、もう……お願いです……」

悦楽の混じった母親の悲鳴は、こんな状態の美咲にはどのように響いているだろう。それを想像しつつ、指先で擦っているだけの状態に耐えられなくなり正面にまわりこんだ誠司は、括られた足首を持ちあげて尻を浮かせると、白い下着を一気にずり下げた。

「いやぁーっ」泣き声を張りあげてキツく合わされた太腿に阻まれ、クルッと裏返しになって留まった。

そこは手の感触で想像したとおり、絵に描いたような無垢そのものの佇まいであった。ほんのひと摘みの、割れ目を覆う役目さえしない黒い纖毛が、白いふくらみの上部を儚げに飾っている。

「ああ……はずかしい……み、みないで……」

泣きながら腰を揺すっている、その子供っぽい羞恥の反応に耐えられなくて、男は恥じらいに怯えている柔らかな双丘へと唇を押しつけた。

「ひいっ！……いっ、いや！」

縛めの身体をのけぞらせたが、大暴れるするようなことは無かった。

腰のくびれのあたりを両手でガッチリと押さえつけておきながら、顔を横にして舌先を肉の閉じ目を上下に這わせ、まだ身体のケアに頓着しない若い少女

の陰部が発する——一日の生活で蒸れて酸っぱさの混じった——生臭い匂いを鼻孔で愉しみ、柔らかな肉の盛りあがりを吸いつつ甘噛みする。

いやっ、いやっ、そればかりを繰り返して口走りながら、美咲は衝撃を受け止めきれず小さな身体をぐったりとソファに沈み込ませた。

「これでもう、お前は俺のモノだ。わかったな」

生まれて初めて経験した刺激と、——自分でも理解することができない——身体の反応に、純真無垢な美少女は怯えている。その顎を摘まんで仰向かせ、儚げに震えている桜色の柔らかな唇を吸った。

誠司には自然な動作だったが、今年の2月下旬で15歳になった美咲にとって、これが異性と交わす初めてのキスであった。

「ううっ」という戸惑いの中に哀しみの混じったような呻きが聞こえただけで、茫然としている少女からは応えるような反応も嫌がる素振りさえも皆無だった。カーテンの向こうでは香織のよがり泣きが切羽詰まりだしている。いつまでも盗み食いを楽しんでいるわけにもいかなさそうだ。ブラを元の位置に戻して双乳を覆ってやり、腰をポンと叩いて浮かせるように指示すると、捲れた下着をクルッと返すようにして穿かせてやった。

（もう、どうにでもして……）と言わんばかりの美咲の嬌態に後ろ髪を引かれはしたが、それを振り払うようにして誠司は厚いカーテンをくぐった。

真鍋はベッドに仰向けに横たわり、その上に香織を跨らせていた。そして、ともすれば突っ伏そうとする上体を押し立てて、両手で形のよい丸みをおびた乳ぶさを下方から荒々しく揉みしだいている。

ひいつ、ひいつと喉を絞りたてながら、香織は夢中で腰をまわしていた。

長く束ねた髪を振り乱し、汗が光る白い肌を野獣さながらにうねらせつつ、醜魁な中年男の——タケノコのように根元を太らせた——肉柱を奥まで啜えて腰を振りたてている姿は、とても娘になど見せられる光景ではない。

背後から見ると、股をいっぱいまで拡げて真鍋の大な腰をまたぎ、逆ハート型にいぎたなく割れた白い尻肉が、ヌメつと濡れ光るドス黒い肉柱を垂直に入りさせているのが丸見えになっている。

その逞しいばかりの動きを見せる肉塊は大きく反りかえり、円を描いている香織の腰はふたつのえくぼを浮かばせていた。

先ほどまでの呻きは、「ああーん……いやあー……もう、もうだめ……」という切なげな訴えに変わる。背後に締めあげられた両手を握りしめて、香織はさらなる愉悅を貪ろうとするかのように腰をグリグリと肉柱に捻じりつけて、最後は空気の抜けるような悲鳴とともに、ガクつと前方に突っ伏した。

真鍋にとっても相当な運動量になったようで、香織の肩先からテカテカに光っている顔をのぞかせると、誠司に向かってニヤリと笑った。

「先にワシのを口で啜えて濡らしよったせいか、えらい早よう逝きよったわ」
まるで氣死したようになった香織の身体を傍へ押しのけると、太鼓腹を波打たせて起きあがった。

誠司がアタツシケースからタオルを渡すと、湯気の立ちそうな禿頭と顔、乳の垂れた胸、太鼓腹を拭く。射精には至っていないらしく、濡れ光る怒張は遅しく起立して脈動していた。

「あんたが犯してるときに飲ませてやろうと思うてな、どうにか堪えたんや」
そう言いながら、自分のイチモツも軽く拭った。

「それでは、次をいただいても構わないのですか？」

「ああ、もちろんや」

それを聞くと、誠司は引きむしるように着ているものすべてを脱ぎ捨てた。

美咲を愛撫することで生じた欲情に、もう寸時も待てない状態になっている。高校に進学したばかりの初々しい娘の身体を玩弄（がんろう）して昂ぶらせた欲望を、その母親の肉体を汚すことで慰めようというのだ。

先ほどまで真鍋が座っていたスツールをベッドサイドに置くと、荒い呼吸で喘いでいる香織の縛めを解いて座面に両手をつかせ、尻を高く持ちあげる恰好にした。足首の辺りを左右に大きく蹴り上げると、内股の奥に茂っている纖毛まで淫らに濡らし、赤く充血させた女陰があらわにのぞかせていた。

香織ほどの美しく上品な女性でも、これほど卑猥な道具を秘め隠しているのかと、この眼を疑いたくなるような、生なましく匂いたつような光景である。そんな恰好で背後から串刺しにされることを悟った香織は、「お願いです……こんな恥ずかしい恰好では……」と、小さな頭部を振りたてて叫んだ。

「恥ずかしいくなるのはコッチだぜ、奥さん。ビチヨビチヨに濡らしたオマ○コを曝け出しちゃってよ」

そんなふうには、娘にも聞こえる声で揶揄しながら白い小尻を平手で叩くと、適度な筋肉と脂肪で丸く形づくられたヒップは、小気味よい音を弾かせる。

「さあて、今度は自分から股を開くん」

固く閉じてしまった股を開くよう、香織に命じると、いったん固く閉ざした大切な部分を哭くへなくような喘ぎを放ちながら拡げてゆく。

「もっと尻を持ちあげて、俺を誘ってみせろよ」

「いつ、いやあーっ」

閉じようとする太腿を割りこませた下半身で妨げると、ゆさぶりたてる腰を手で押さえつけておいて、もう一方の手で握った怒張を一気に貫きとおした。

「ああっ、だめ！裂けちゃう……いやあー、いやあーん」

「なんだ、もうそんな甘い声を出して。イヤが聴いて呆れるわ」

両手で腰のくびれを掴んで、グンと子宮口まで衝きあげてやった。

「うつ、ううん……くっ……くるしいっ……」

「さつきイッたせいかな、もうずいぶん熟してるなあ。ねっとり絡みついてくるところもスケベで、堪らないオマ○コしてるよ」

「ああ、そんな……もう言わないで……お願い……」

真鍋に解されていたとは言え、あまりに並外れた怒張に息を乱している。

誠司は強靱な亀頭で子宮を抉（えぐ）り、張りだした鰓で粘膜を擦りたててやると、熱い膣内に供給される潤滑の粘液が泡立ち始め、香織の秘肉がひとりで蠢き（うごめき）だした。

入り口の付近で肉柱を食い締めている健気な動きを味わいながら抽送を続けていると、よがり泣きしながらも次第に香織は爪先だちになって腰をもたげ、角度を調整しつつ奥まで咥え込もうとしていた。その間にも喉を絞りたてては乱れ、怒張を食い締めつつ胴ぶるいを起こしている。

真鍋に烈しく犯され、体内からすべての精気を放出させた余韻が残っており、オーガズムに達してしまいそうな状態に陥っているのだろう。そうと見た真鍋は遅れをとるまいと、香織の束ねた髪を掴んで顔を引き起こした。

「ほれ、次は上の口でワシのを奥まで咥えるんや」

「……こ、こんな……」

肉鞭で呆けた香織の頬をしばくと、抗議する口に強引に肉柱をねじ込んで、

ぐふつという呻きとともに喉の奥まで塞いだ。汗まみれの美貌が引きつるよう
に歪み、吹き抜けた鼻孔から嵐のような息づかいが噴出した。

「さて、いこか、岡野はん」

2人は同時に逞しいモノをそれぞれの穴に衝き挿れだした。誠司は尻を抱え
て扶へえぐりたて、真鍋は髪を引き掴んで香織の苦鳴を楽しむように、喉奥
を小突きあげる。

「んぐ……んぐつ……ぐふつ……うごお、おごつ」

このうえない逸物による2人がかりの凌辱に香織はただ白眼を剥き、口の端
からよだれの泡を噴いてのたうつばかり。舌も唇も口腔内は荒らされ放題で、
息をつく暇へいとまへさえも与えてはくれない。

それどころか背後から衝きあげてくる悦楽に呼応して叫ぶことで昂ぶりを解
放することさえできない。ただ汗を噴き出させつつ、ポロポロと涙を溢しながら
呻き散らすばかりだ。

「こんな淫らに犯されても感じるらしくて、可愛らしく食い締めてきますよ」

「表面は上品でも、この奥さんは相当な好きもんですよ。ホンマ、たまらんわ」
「荒っぽく虐められるほどに味が濃厚になるみたいです」

香織はその間ずっと男どもの快楽の道具あるいは欲望のはけ口になり果てて、
プライドどころか魂まで揉みくちやにされている。

そして男たちの果てる瞬間がきた。上と下で両方同時に激しくなる動きと、さらに硬く膨れあがつて雄叫をあげる肉塊に、香織はほとんど気死するほどに喉を絞った。口だけは逃れようと手で真鍋の腰を押して顔を振りたてたが——呆気なく手でパシッと叩かれると——頭をガツチリと驚掴みにされながら喉の奥まで塞がれ続けた。

そして前後で、ほぼ同時に白い爆発が起こった。香織は身構えるすべもなく、のけぞらせた喉を激しく打つ灼けるほどの異物を喉で受け止めた。まるで魂がくるめくように全身の筋肉が収縮し、ドロつとした体液が喉を降りてゆく。

意識が遠のいて心が張り裂けそうな衝撃に苦悶の嗚咽を放ちながら、身体を貫いて爆発を続けている誠司の剛直をキリキリと絞りたてた。

膣奥でも精液をすべて絞り取ると、ガクッと膝をついて崩れるように上体をスツールに預けながら完全に意識を失った。会陰部から内腿にかけて誠司の放った白濁が垂れて流れ落ち、口内に残っていた真鍋の精液は半開きの口角から垂れ落ちて床のカーペットに染みを作っている。

あれほど美しく気品に満ちていた女性が惨めなまでに貶められ、まるで朽ち捨てられたボロ雑巾のように見るも無残な姿態を見下ろして、男たちは嗜虐欲へしぎやくよく〜をこれ以上ないほど満たしていた。そしてほどなく、誠司は先ほどの若者に唐沢邸まで車をまわすように連絡を入れた。



降りかかる破瓜の惨劇

1985.6.25 Tue.

白いセーラー服が少しだけゆったりして見えるのは、それに身を包んだ美咲が成長の過程にあるが故かもしれない。部活動のある日は髪の毛を2つに結わいていることもあり、それもまた少女を幼く見せているのである。

清華女学院初等部に入学をしてから今日に至るまで毎朝のことではあるが、いまだに毎朝のラッシュに慣れることができない。慣れるどころか、中等部の2年生あたりから——とりわけ、春から高等部に進学することになって以降は——通学の満員電車が苦痛になっている。

車内では意識的か無意識か判別のつかない接触と圧迫に耐えねばならない。あきらかに故意で触ってくる男がいれば睨みつけ、それでもしつこく手指を動かしてくる痴漢からは鞆で身を護るか、体をずらして逃れようとすののだ。

美咲が身じろぎして移動の気配を見せると、周りの乗客たちは不思議と体をずらしてくれることも経験によって知った。

第2章では美咲の処女が蹂躪され、そこから苛烈な調教が開始されてゆきます。是非、本編にて続きをお楽しみください。